



校長室だより

2021年 4月23日

校長 小崎 功二
こさき こうじ

いじめの問題について

「いじめ」防止のためには 身近な大人が手本を示すことが大切です

近年、学校では「いじめ」の問題が最重要課題となり、未然防止や早期発見、迅速な対応のために様々な取組が行われています。そんな中で、残念ながら、子供たちに手本を示す立場の大人社会にも、いじめや様々なハラスメント（嫌がらせ）が存在するのも事実です。子供たちに正しい人間関係を指導するためには、まず大人が手本を示さなければなりません。郡山小学校では、まず私たち教職員がハラスメントのない職場づくりに勤め、互いに助け合い思いやりを持って接する姿を子供たちに見せていくことが、子供たちの教育にとって大切なことだと考えております。御家庭でも、ぜひ大人が手本を示してくださいませようお願いします。

「いじめ」についての考察

学校における児童間のいじめについて、経験を基にして私見を述べます。いじめは、人間という種に備わっている性質が関係している部分もあるのかもしれませんが、いつでもどこでも誰にでも起こり得るものです。その正体について考察することで、対応策にも繋げていきたいと考えています。

○失感情のなせる技＝「いじめ」

憎悪や怒りからの攻撃（喧嘩）の場合は、憎しみが解消していく過程で相手の人格を認知することができ、反目し合うことがあっても感情の交流はあり、一過性のもので、続いて深刻ないじめに発展することは希です。

一方、感情を介在させない場合の攻撃は、容赦のない、果てしない陰惨ないじめに繋がる可能性が高くなります。過密なスケジュールや、禁止や命令によって縛られた生活等により、自律した判断や選択、感情を理性でコントロールする余地がない子供たちが、感情を喪失し（しらけ）、画一的に「まとまりのある？」集団の中で、「同じ」であることに安住している状態（没個性的な全体主義）に陥っている場合、その危険性が高まります。また、自分と違う個性との感情の交流が持てないこと（異質な物への恐怖感）が相手に過敏に反応し排除しようとする攻撃してしまう要因になることもあります。このような全体主義的な間違った正義感を排除していくための学級、学校づくりが必要です。

そのためには、責任ある自由を重んじる指導方針で、子供自身の意志と感情と責任を尊重し育てる工夫や、互いの感情の交流を図る手立て（異質な人格を認め合う雰囲気醸成すること）について、教職員が常に意識しながら働きかけることが大切です。郡山小学校では、全職員一丸となって、日頃の授業や学校生活を通して基本的な信頼関係づくりを図り、その信頼関係に基づいて多様な個性を認め合い、そこから新しい価値を創り出しつづける雰囲気や、安心して互いにとげのない建設的な意見を述べ合える雰囲気（支持的な雰囲気）の醸成を目指して参ります。

※裏面へ続く

..... 切り取り線

学校への御意見・御要望・校長に知らせたいこと など

2021年4月23日（ ）年（ ）組 児童氏名

※匿名でも結構ですが、御連絡が必要な場合等を考え、記名していただくとありがたいです。

※担任に御提出いただいても、校長室前のポストに直接入れていただいても、校長に直接手渡していただいても、いずれでも結構です。

○いじめない・いじめに流されない子供を育てる

*** 自己の尊厳の確立 * 「大切な自分」の自覚 * 不安の解消 * 感情機能の回復 * 生きる情熱の喚起**

保護者として、「愛しているのは当たり前！」と信じていても、子供には伝わらないものです。「あなたが大好き！」「あなたは大切な人！」「どんなことがあっても私はあなたの味方！」ということをも、まず、無条件で、子供にはっきりと言葉や態度や表情で示すことが必要で、それによって子供たちは、「自分は愛されている」「自分は大切なのだ！」「自分を大切にしよう！」と思えるようになります。叱ったり注意したりするためには、最後の最後まで裏切ることのない愛情の裏打ちが不可欠です。これは、担任にも言えることです。欠点も、その子供のありのままの姿の一部です。そこが「だめ！」と、自己否定を迫ってはいけません。欠点も個性として認め、もし問題があれば、行動パターンや表現方法を変えるなど、実情に即した方法論をアドバイスすべきでしょう。

長所を見つける努力を怠らず、ほめることをためらわず、子供が「生きる喜び」と「自分は大切なのだ」という思いを感じながら成長できるように支援したいものです。このような方針を学校と家庭で共有しながら、同じ気持ちで子供たちを育てていきましょう。

○努力が適切に評価されることの重要性

「みんながんばったのだから、みんなが1等賞？」子供がそれを望むでしょうか？「同じじゃない！」「おまえとはちがう！・・・」など、不満が攻撃（陰湿な差別化）へと変わることもあります。健全で公正な力の論理の中で、努力が適切に評価される仕組みを整えることが必要です。上位に対しては満足感・達成感・誇らしさを味わわせ、更に待たせることなく先へ進む機会を与えることで、下位への思いやりや配慮を持てるようになります。下位に対しては個人内の充足感を持たせるために丁寧に意を尽くすことで、上位への賞賛・敬意も芽生えます。

郡山小学校では、上位下位が常に固定化しないように多様な基準や場面設定を行い、その都度、下位を認め励ますことに欠かさず配慮しながら、公正で、誰もが納得し、安心して努力できる環境、互いの良さを素直に認め合える雰囲気を目指して参ります。

いじめは偶発的危機（存在の否定）であり、価値ある試練では決してありません。郡山小学校では全職員が「いじめは決して許さない」という共通理解の下で、子供たちとの信頼関係構築に努めながら、大切な子供たちをいじめから守って参ります。